

平成 27 年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：平成 27 年 4 月～平成 28 年 3 月

1. 学校概要

学校名 宮城県気仙沼市立面瀬小学校

種 別 ☐ 保育園・幼稚園 ☒ 小学校 ☐ 小中一貫教育
☐ 中学校 ☐ 中高一貫教育 ☐ 高等学校
☐ 教員養成 ☐ 技術/職業教育
☐ 特別支援学校 ☐ その他 ()

所在地 〒988-0133 宮城県気仙沼市松崎下赤田 58 番地

E-mail omo-s14@mable.ocn.ne.jp

Website http://www.j-miyagi.net/omose-syou/

児童生徒数 男子 178 名 女子 163 名 合計 341 名
 児童・生徒の年齢 6 歳～12 歳

2. 実施活動（複数選択可）

- ☐ 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- ☐ 国際理解
- ☐ 世界遺産
- ☐ 平和・人権
- ☒ 環境
- ☐ 気候変動
- ☒ 生物多様性
- ☐ エネルギー
- ☒ 防災
- ☒ 食育
- ☐ 伝統文化
- ☐ そのほか ()

3. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

①テーマ「人とつなぐ 自然とつなぐ 未来へとつなぐ ESD」
～ふるさとの環境から学ぶ～

②地域に根差した体系的な環境学習プログラムの実践

学年	単元名	主な活動	地域人材の活用 関係諸機関との連携	まとめ・発信
1 年	面瀬の四季 ・ はる ・ なつ ・ あき ・ ふゆ	学校探検 お寺の見学 公園散策 秋と遊ぼう ・ ドングリごま ・ 松ぼっくり剣玉 伝承遊び ・ お手玉 ・ コマ回し 等	お寺の住職 保護者（見守り隊） 地域のお年寄り	保護者への 発表会
2 年	・ おいしく育て 私の野菜① ・ まちたんけん ・ おいしく育て 私の野菜②	サツマイモ、枝豆 等の栽培 地域巡り 調理体験 ・ トマトを使った 調理 ・ 豆腐作り	地域のお年寄り 公民館長 地域の店や工場等 カゴメキッチンカー 地域の豆腐店	お世話にな った地域の 方々や保護 者への発表 会
3 年	面瀬川生き物 探検隊	面瀬川での生き 物探し ・ 種類を知る。 ・ 個体の変態につ いて観察する。 ・ 上中下流の生き 物分布を探る。 ・ すみかを観察す る。	保護者（見守り隊）	レポート 生き物マッ プ 保護者への 発表会
4 年	未来に残そう 水辺の環境	面瀬川の環境調 査 ・ 指標生物調査 ・ 面瀬川源流探検 ・ 面瀬川汽水域調	保護者（見守り隊）	ポスター製 作 テレビ会議

		<p>査</p> <p>地域の水体系調査</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高大堰 ・ 岩月用水路 <p>地域環境の未来を考える交流会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 面瀬川と多摩川の環境保全に関する発表交流 	<p>海藻研究所長 新井 章吾 先生</p> <p>東京都立多摩第2小学校</p>	リーフレット製作
5 年	水産都市気仙沼～海と共に生きる～	<ul style="list-style-type: none"> ・ 遠洋マグロ船体験乗船 ・ マグロ料理教室 ・ 食育授業 ・ 海辺環境や養殖についての講話 ・ 養殖体験 ・ 漁業を支える仕事についての講話 ・ 海と共に生きる気仙沼の魅力（漁業・養殖業）についてのプレゼンテーション 	<p>北部鯉鮪協同組合</p> <p>北かつマグロ屋</p> <p>気仙沼の魚を学校給食に普及させる会</p> <p>ワカメ養殖業者 牡蠣養殖業者</p> <p>ワカメ養殖業者</p> <p>漁具取扱い業者（株）アサヤ</p> <p>保護者 講話・体験等でお世話になった方々</p>	<p>リーフレット製作</p> <p>お世話になった方々や保護者へのプレゼン発表</p> <p>他校への発信（予定）</p>
6 年	ひびけぼくらの声～みんなで考えよう「未来都市」気仙沼	<p>面瀬地区未来のまちづくり講座</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自然環境 ・ まちづくりの視点 ・ 防災、減災 ・ エネルギー <p>まちづくりの魅力</p>	<p>面瀬地区まちづくり協議会</p> <p>神戸大学 中央大学 NPO 法人あそビーバー</p> <p>東北電力</p>	<p>ジオラマ製作 ポスター製作</p>

		力発見 ・地域の自然環境を生かした、「遊び」の創造 ・連風製作 ・面瀬地区のまちづくりの未来に関する、様々な視点でのプレゼンテーション	NPO 法人あそびーバー 気仙沼風の会 保護者 面瀬地区まちづくり協議会 NPO 法人あそびーバー	お世話になった方々や保護者へのプレゼンテーション
--	--	--------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------	--------------------------

昨年度までの活動の反省を生かし、プログラム内容の改善を図った。具体的には、児童の関心・意欲を一層高める体験の導入を工夫し、「書く活動」を重視した言語活動（調査・まとめ・発表・交流）の充実に努めることによって、児童の主體的な取組を促すとともに、児童一人一人が「思考力・判断力・表現力」を着実に身に付け、「批判的思考」や「コミュニケーション能力」、「未来予測」等 ESD で目指す能力の育成を図った。

③ 海洋教育の導入（5 学年の実践から）

今年度より、東京大学海洋アライアンス海洋教育促進センターと連携し、5 学年の実践を中心に、活動の充実に努めた。実践の概要を以下に示す。

No.1	
1.単元名 水産都市気仙沼 ～海と共に生きる～（総合的な学習の時間）	
2.学年 5 学年	
3.実践日 平成27年4月～平成28年3月	
4.海洋教育に関するねらい※該当するものに○（複数可） 利用する	海に親しむ ・ <u>知る</u> ・ <u>守る</u> ・
5.目標（本単元により達成したい習得・到達状況を示す）	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域で水産業を営む方々から話を聞き、震災から水産業の復興に向けての苦労や努力、復興への思い、希望について知り、自分たちが住む気仙沼の水産業が目指すべき未来など、「海と共に生きる」ということの意味を考えながら主体的に取材活動を行うことによって、各々に課題意識を高め、さらに知りたいことを追究し、自分が伝えたい・広めたいことなどについての確にまとめて表現（発表や発信）する力を身に付ける。 ・ ワカメや牡蠣の養殖の様子を観察したり、ワカメの種付けや刈り入れを体験したりする活動を通して、気仙沼の海の豊かさを実感させると共に、ふるさと気仙沼の良さをずっと大切にしようとする心情や態度を育むことによって、これまでの自分の生活を振り返って見直したり（思考・分析・考察）、今後の生活を改善していくための指針を見出し、主体的・計画的に進んで実践したり（主体性・計画性・実践力）しようとする能力の伸長を図る。 	
6.指導の流れ（本単元のねらい、準備や他機関連携にあたっての留意事項、学習上の特徴や工夫（記録方法、着眼点の特徴等）などを示す）	
1 本単元のねらい <ol style="list-style-type: none"> （1） 震災後の気仙沼の海の環境や水産業の現状、そこで働く人々の思いや願いを、調査や体験活動を通して探究的に学習することで、「海と生きる」を標榜する気仙沼の産業の未来への夢や希望をもつことができるようにする。 （2） 漁業体験や取材活動を通して、「ふるさと気仙沼」の未来像やその実現のための方策について考えたり、話し合ったり、広く発信したりすることを通して、主体的に学び、実践する能力と態度を育てる。 	

2 留意事項

- (1) 第4学年までの活動（学校近くを流れる面瀬川とその流域での遊びや生き物及び水質等の、水辺環境についての学習）を振り返ったり、想起したりしながら、川を介した森・里・海のつながりを十分に意識した学習展開に努める。
- (2) 児童の学びの意識が連続するように、体験活動を指導計画に明確に位置付け、協力頂く地域住民や関係諸機関と事前に綿密に協議し、共通理解を図った上で学習を進めていく。
- (3) 気仙沼市の震災復興テーマ「海と生きる」との関連（インフラや産業の復旧・復興と自然保全等）を考慮し、地域や関係諸機関とかかわり合って、互いに積極的に発信したり、交流し合ったりする双方向での学びを構築できるよう努める。

3 学習上の特徴や工夫等

(1) 記録について

① 「書く活動」を重視した言語活動の充実

本校では、全学年国語科を中心に「書く活動」を指導計画や指導過程へ明確に位置付け、言語活動の充実を図っている。本学習においては、体験活動や取材活動の場や、資料の分析や考察等課題の追究の場において、素早くメモさせたり、自分の考えや感想をノートやプリントに書き込ませたりして、課題解決の練り合いや活動の振り返り、次時の活動に活用することができるような指導・支援に努めてきた。

② 積極的な取材・発信・交流

児童が、主体的に活動の内容や方法を振り返ったり、自分たちが伝えたい思いや願いをリーフレットにまとめたり、それらを保護者や地域に発信したりすることで、学びの発信・交流に努めてきた。また、体験や講話をきっかけに連携を築き、E-mail や Fax で児童の疑問に回答して頂くことで、児童の学ぶ意欲を高めたり、水産業に関する知識・理解を深めたりすることができた。

(2) 着眼点の特徴

① 『地域で学ぶ』・・・ワカメの栽培体験（種付け～収穫）の推進

ワカメ養殖の歴史と従事者の努力や工夫、特に、大震災後の復興努力等について講話を聞いたり、販路開拓や加工食品の開発等について取材したりすると共に、年間を通してワカメの栽培（種付け～観察～収穫）を継続して体験することにより、養殖漁業従事者の努力や工夫について体感させる。

さらに、未来につながる養殖漁業の振興策について考えさせ、交流することにより、『海と共に生きる 気仙沼』について主体的に学ぼうとする能力と態度を育てる。

② 『地域から学ぶ』・・・マグロ船乗船体験、マグロ漁師との交流、マグロを使った料理教室

マグロをテーマに地元の企業、組合、NPO 法人等の協力を得て、基幹産業である水産業の振興には、漁師の命をかけた苦労と努力・工夫が長い歴史と共にあること、漁船には、最新の工業技術・科学技術が凝縮していることを、さらには、マグロが調理法の工夫により、様々に調理可能な優れた食材であることなどを、体験を通して学び、『海と共に生きる気仙沼』の復旧・復興や水産業の未来への展望等について、主体的に学ぼうとする能力と態度を育てる。

③ 『地域のために学ぶ』・・・学習記録・活動記録のまとめと発信

学習を通して得た記録や情報を整理し、『海と共に生きる気仙沼』の未来について、児童それぞれが抱いた思いや願い等をリーフレットでまとめ、保護者や地域及び学習協力者・他校等に発信したり、それらを学校 HP に掲載して発信・交流したりすることを通して、自身の夢や希望の具体性や実現性を高める。

7.具体的な学習活動の記録(実際の活動内容や各々の場面でのねらい、小目標等を示す)

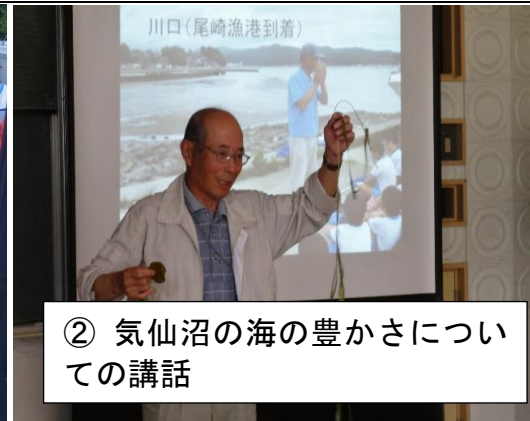
1 海と共に生きる地域の方の話を聞こう

気仙沼で水産業に従事する方々から話を聞いたり、実際に仕事の様子や現場環境を見学したりすることによって、気仙沼の海の豊かさや気仙沼の海と共に生きる方々の思い・願いを知り、気仙沼の水産業の現状や未来に関する課題を設定したり、課題追究に生かしたりする。

- (1) 地域で牡蠣養殖を営む小松さんから、養殖の歴史や先人の思い・願い、養殖に適した気仙沼湾の環境等について、養殖施設や道具の見学をしながらご講話を頂いた。
- (2) 地域でワカメ養殖を営む小野寺さんにご来校頂き、面瀬川が気仙沼湾に注ぐ汽水域が豊かな漁場であり、海の生物の生息域であることや、震災後、着実に復活しつつあることなど、海のもつ力強さなどについてのご講話を頂いた。
- (3) 気仙沼の遠洋マグロ船「勝栄丸（勝倉漁業）」に見学乗船し、船長や漁労長さんから、遠洋マグロ漁の様子や急速冷凍の技術や設備、マグロ船の構造やいろいろな道具類について等、海洋資源としてのマグロ漁の現状と課題についてご講話頂いた。
- (4) 復興庁「新しい東北」先導モデル事業として「食文化をみつめなおすプロジェクト」を推進する「気仙沼の魚を学校給食に普及させる会」（代表：株式会社臼福本店 臼井壮太郎氏）の方々から、事業に取り組み始めたきっかけやこれまでの経緯、この取組を通して広めていきたいこと等についてご講話を頂いた。



① 牡蠣養殖施設の見学と講話



② 気仙沼の海の豊かさについての講話



③ 遠洋マグロ船への見学乗船



④ 「気仙沼の魚を学校給食に普及させる会」による講話

2 気仙沼が誇る「三陸ワカメ」のよさを探ろう

ワカメの養殖過程の一部（種ばさみ・刈り入れ）の体験を通して、「海と生きる」気仙沼の水産業の復旧・復興を目指す小野寺さんの思いや願い、高品質で美味と評価の高い三陸ワカメを育む気仙沼の海の豊かさを実感させ、森・川・海のつながりについての理解を深めた。



3 遠洋漁業の素晴らしさと味覚を味わおう

北部鰹鮪協同組合（北かつ）と連携した「親子マグロ料理教室」での調理体験や親子での会食を通して、漁師が命懸けで獲得した貴重な食材であるマグロを、美味しく頂くための調理法や食材を扱うシェフの思い・願いを実感させ、「海と生きる」を標榜する気仙沼の水産業の豊かさを感じ取らせ、一層の関心



4 水産業を支える仕事

漁具や漁業資材などを通して気仙沼の漁業を支える（株）アサヤから講師を招き、製品開発の工夫や人・環境への配慮などについてご講話頂き、気仙沼の水産業は、「獲る・育てる」だけではなく、多くの関連産業との相互の協力があって成り立ち、発展してきたことへの理解を深めた。



5 「海と共に生きる」気仙沼の魅力を発信しよう

様々な体験や講話を基にして学んだことや、自分で調べたことをもとに学習のまとめとしてリーフレットを作成し、お世話になった方々を招いての発表会をしたり、保護者や地域の方々、他校の児童等へ送付・発信したりして、自分たちの学びの発信・交流の機会を広げる。さらに、自分たちの学びの意義（海と共に生きる）や身に付けた力（他者からの取材・大切なことへの気付き・知る必要があることや知りたいことの追究・調べたことの分析・考察、伝えたいことの表現・発信等）について振り返り、今後のより良い学びにつなぐ。



8.指導のポイントや工夫（指導における要点や工夫、他科目との関連性等について示す）

- 1 児童が川を介した森・里・海のつながりを強く意識して学習に臨めるようにするため、これまでの川の学習をもとに想起し、森林で蓄えられた栄養素が川に流れ出て、汽水域で成長するアマモ等の海草や、多様な生き物の餌となるプランクトン等の微小生物を豊かに育てているなどの講話を聞き、面瀬川の河口の尾崎海岸でワカメや牡蠣の養殖が盛んな理由について考える。
- 2 学習で得た知識の理解を深め、主体的に課題を設定して調査や取材を行い、集めた資料を整理・分析してまとめ、積極的に発信・交流する道筋を示すため、社会科「水産業のさかんな地域」や理科「植物の発芽と成長」、国語科「活動報告を書く」等の学習との関連を図る。
- 3 学習したことを、持続的・発展的な学びにつなげていくために、学んだことや考えたこと等をノートにしっかり書かせたり、書いたものを基に活動を振り返ったり、まとめに生かしたりする場面に十分時間をとり、指導計画に位置付ける。
- 4 活動のねらいに沿った充実した活動を展開させるために、地域人材や関係諸機関との打合せを綿密に行い、学習の流れを共通理解した上で指導・支援に当たる。さらに、学習内容を多面的に捉えさせるために、立場が異なる人材の組み合わせ（例えば、「養殖業者と関係業者」や「経営者と漁師及びシェフ」等）を考慮した学習計画を立てる。
- 5 年間または学年の系統性を考慮し、児童の実態に応じた探究活動を展開させるために、学期の始まり及び終わりに「生活科・総合的な学習の時間情報交換会」を設定し、活動の相互理解や学年間の接続・関連・活動の改善策などについて協議・検討する。

9.成果（本単元を行ったことで得られた実際の成果（児童生徒の知識習得や意識変容）等について示す）

- 1 面瀬川河口付近での学習などから、児童は、森・川・海のつながりについて理解を深め、自分たちの生活を取り巻く自然環境に一層の関心を示すようになった。特に、小魚の産卵に適した海草であるアマモの繁殖が、豊かな海であることを示すバロメーターになっていることや、面瀬川河口の干潟に珍しい貝類が多種多様に生息していたこと等について、児童は目を輝かせて聞き入っていた。

<p>2 教科学習との関連を図ることで、児童が主体的に学習を進める機会や時間を十分に保障することができた。今年度の国語科の校内研究の視点のひとつとして「書く活動を重視した言語活動の充実」を図っている。「書く活動」については、昨年度までの、生活科・総合的な学習の時間の取組での積み重ねもあり、教科と領域双方向での学びの充実にも有効であると捉えている。</p> <p>3 学んだことや考えたこと等をノートにしっかりと書く習慣を身に付けさせることによって、児童は、体験や講話から学んだ養殖の仕事内容や道具の役割、養殖に適した環境等の知識をもとに、学習のまとめとしてリーフレットを作成することができた。</p> <p>4 これまでの学習では、養殖業を営む方の仕事や震災からの復旧・復興に懸ける思いや願いを重点的に取り扱ってきた。気仙沼の水産業は様々な業種で働く人々が、互いに協力し合ってより良い復旧・復興を目指し、「海と生きる」ふるさと気仙沼を再生させる取組に力を尽くしていることを理解することができた。</p> <p>5 学期毎に各学年の活動の成果や課題を共有し、次の活動の改善策について協議・検討して学習を展開させたことは、本校の「地域に根差した体系的な探究型環境学習プログラム」の改善と推進に生かすことができた。そのことにより、児童は、学習テーマの学年間のつながりや本単元で学ぶ意義を感じながら、意欲的に課題を追究したり、学んだことを次の学習に生かしたりしようとする態度がしっかり身に付けることができた。</p>
<p>10.課題(本単元実施にあたっての反省点や、今後の実施にあたって特に留意すべき課題について示す)</p> <p>1 お世話になっている地域の方々が高齢であるということと、体験活動が天候や生育状況に左右される内容であることから、今後は変更可能な複線型の指導計画の工夫が必要である。</p> <p>2 今後も加速化する復旧・復興事業とそれに伴う環境の変化をどのように捉えて活動に反映させていくか、また、6学年で学習する「未来のまちづくり」にどのようにつなげていくかなどについて、十分に検討する必要がある。</p> <p>3 ふるさと気仙沼の復興テーマ「海と生きる」を教師自身が自分のこととして捉え、本校の「地域に根差した体系的な探究的環境学習プログラム」を通して学んだことが、児童の今後の生き方の拠り所となるような指導・支援の工夫を図っていきたい。</p>

(2) 活動時間について(下記から選択して下さい。)

- ☒ 通常の授業時間を使用(総合的な学習の時間を含む)
- ☐ 時間外活動の時間を使用
- ☐ ユネスコクラブの活動として実施
- ☐ その他()